

とことん知りたい! 台湾! 第10回

こんにちは、^{たいゆうゆうこうかい}台熊友好会です。台湾人に「熊本は暑い」と言わしめるほどの猛暑が続いていますが、本コラムが皆さまのお手元に届く頃には、多少は秋めいているでしょうか。前回、新竹を中心に活躍する文化団体をご紹介しましたが、今回は彼らの伝承する客家文化に関連し、少しお話しさせて頂きたいと思います。



新竹市は新竹県にあらず

台湾の行政区分の変遷は、民主化と密接に関係しています。地理的区分は日本統治時代の名残を残しつつも、中国の行政区分（直轄市：台湾においては行政院直轄）が採用されており、日本のそれとはかなり事情が違います。新竹市は、もともと省直轄下に置かれていたものの、途中同等の新竹県の県轄下へと降格、1982年に再度、省直轄下へと昇格し今に至っています。

ちょうど私が渡台し1年が経った頃の2010年12月、行政院直轄市として新北市、台中市、台南市が新たに誕生し、それまで「台南県永康市」だった大学の住所も「台南市永康区」へと変更になったのを覚えています。

現在、台湾では、直轄市は台北市、新北市、桃園市、台中市、台南市、高雄市の6つ。形式上省の下部組織とされる県が、新竹県、苗栗県、彰化県、南投県、雲林県、嘉義県、屏東県、宜蘭県、花蓮県、台東県、澎湖県、金門県、連江県の13県。市が基隆市、新竹市、嘉義市の3市となっています。

直轄市への昇格には要件の1つとして人口200万人というのがあります。2021年に、新竹市と新竹県が合併し一つの大きな直轄市を目指すという計画が、話題になりましたが、単なる政治的なパフォーマンスだったとの見方もある中、今なお一部では昇格案が囁かれています。

台湾客家

17世紀頃、福建省や広東省から台湾に移住して来た人々の子孫のことをさします。台湾への移住者としては後発で、その時期も一定ではなくまた少数だったことより、多くは主に丘陵地へ移住し、古来の伝統文化を維持しつつ他の民族と共同生活をした者、他の民族集団の影響を受け同化した者と様々だといわれます。客家委員会（2001年6月14日、多元民族文化を重んじる社会の実現を目指し、客家文化の存続のために行政院管轄の委員会の一つとして成立）は、「客家基本法」において客家を「客家の血または客家のルーツを持ち、客家を自認する人々」と定義しており、その数約466万9千人。台湾の全人口2342万442人（2024年1月内政部発表）の約2割に当たります。人口比率の上位は、新竹県（67.8%）、苗

栗県（62.5%）、桃園市（39.9%）、花蓮県（34.2%）、新竹市（30.3%）と、台湾の北部が中心であるものの、屏東県、台東県、台中市といった南部や中部、東部にも存在し、人口数で最も多いのは、桃園市の約90万5千人とされています。

元々は客家語（五つに分類、現在では話せない人が増加）を話し、自然や神、先祖へ敬意を払い、少数派であったがゆえに、周囲との良好な関係構築のために、自分達が置かれた環境の改善に果敢に挑みながらも、自らは儉約家で勤勉な人が多いのが特徴のようです。

多民族社会

台湾はその歴史からも明らかのように、実は重層的な移民社会であり、多文化の地といえます。福佬人（または閩南人：17



世紀以前に福建省等から台湾に渡ってきた漢民族の子孫）が約7割、そして客家人、原住民族（17世紀以前から台湾に住んでいたとされる人々の子孫）、外省人（戦後国民党と共に中国から渡ってきた人々の子孫）が1割前後と、大きく分けて4つに分類されます。

現在台湾には、原住民として、認定されている部族だけでも16存在します。総勢200名程度の小さな部族から、大きいものになると20万人にも及ぶといわれており、原住民認定を受けている数は56万人と、台湾の全人口の約2.4%に当たります。

漢民族が中心の中、原住民族はそれまで長く弾圧を受けてきたこともあり、先の蔡総統が、原住民族に初の謝罪を行なったことは、記憶に新しいかも知れません。その他原住民族へは優遇措置もあり、台湾で大学の入試に関わった際、「原住民の学生には特典（一割加点）が設けられているのだ」と聞き、当時知識の乏しかった私の頭には「？」がついたものです。台湾社会は、様々な文化が融合した社会ともいえ、一言で言い表すのは容易ではないなとつくづく感じます。

（石橋妙子）

客家委員会 「台湾客家について」 < <http://webc.hakka.gov.tw> >
客家委員会 [2022] 「110年全国客家人口暨語言基礎資料調查研究」
原住民族委員会 < <https://www.cip.gov.tw/zh-tw/index.html> >

中国語一言レッスン

ドッエ
「對」

同意の「はい」また「そうです」にあたる對。「啊」「吧」「嗎」が後ろに付いて、ニュアンスや意味が変わってきますが、それはまた別の機会に。「そうそう!」と返事をしたい時など、是非「對、對!」と連呼してみてください。